

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	阿房律：雑録
Author(s)	赤峰, 禿山
Citation	龍南會雜誌, 119: 59-73
Issue date	1907
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6014
Right	

雜 錄

阿 房 律

赤峰禿山道士遺稿

禿山道士久しく龍巖洞に棲む、放言高談、樹間の猿を驚かし、谷底の龍を駭かす、居ること七年、一夜狂風怒號し天地晦冥、樹挫け、谷埋まる、早旦里人行きて訪ふ、道士の影だにもなし、唯机上一篇の文を止むるのみ、題して阿房律と云ふ其議を解する能はず、その文亦た極めて澁晦、その眞義を解する能はざる者あり、乃ち之を世に公にして、識者に問ふと云爾

◎唯幼稚なりしが故也

昔は神怒て、人間の祖先を、エデンの樂園より追ふ、今は人怒て、神をこの地球より追はんとす、昔はプロメトイス嘗て、神と戦ひて勝たず、萬神の嘲笑諷刺の的となる、今は神の代表者は、地中海の一隅、長靴半島の一點に、纔かに孤城落日の餘命を保つに過ぎず、その徒黨は共和政府に追はれて、全世界の物笑ひとなる、

神に進化し、人間に進化あり、神の智能に發達なし、人間の智能に發達あり、昔は神は全智なりと信せられ、全能なりと信せられ、到る處遍く在らざることなしと信せられたりかく信せられたりしは、かく有りしが故に、かく信せられしには非ず、かく信せられたりしは、唯

人間の幼稚なりしが故也、唯人間の愚昧なりしが故也、

◎プロメトイス復活

神の子は復活したり、而も進化なく、發達なき神の子は、神以上に大なること能はず、

プロメトイスは復活したり、而も人間の祖としての彼の復活は、神の子のその如く、無意義なる復活には非ず、彼の子孫は、甚大の速度を以て、繁殖し、膨脹し、その進化、その發達は、殆ど涯限なからんとす、

復讐は始りぬ、戦は始りぬ、

これをプロメトイスの復活と云ふ、

◎面白き哉、ア、面白き哉、

戦は今まさに最中なり、面白き哉、

錄

嘗てサタンと戦ひて、一度勝ちしも、終に彼を全く滅ぼすこと能はざりし神は、今やサタンと同盟して、人間と戦ひつゝあり、面白き哉、

神もし、サタンの幻術を用ひて、吾を惑はさん乎、吾に悟性の淨玻璃鏡あり、もしミクロコツケンと變じて、水滴中に隠れん乎、吾に顯微鏡あり、もし惑星となりて、天空に逃れん乎、吾に望遠鏡あり、もし又再び歸り來りて、牧師の腦中に匿れん乎、將た妊婦の腹中に潜まん乎、吾に解剖の術あり、エツキス光線あり、面白き哉、

サタンの幻術も、殆んど用ふる所なからんとす、面白き哉、

最後の手段は、唯三十六計のみ、彼逃るること千里ならば、吾亦た追ふこと千里までは止まじ、彼逃ること萬里ならば、吾亦た追ふこと萬里までは止まじ、面白き哉、

追へ、大に追へ、大地の盡くる所まで、星の盡くる所まで、宇宙の盡くる所まで、面白き哉、戦は今正に酣なり、面白き哉、ア、面白き哉、

◎戦へ、大に戦へ、

戦へ、大に戦へ、力の續かん限り、息の續かん限り、最後の血滴の盡くるまで、

人生の眞意義は戦鬪なり、プロメトイスの子孫は、大に戦はざる可からず、

人間の戦は、神に對する復讐の戦なり、復讐は七倍ならざる可からず、否、七十倍、七百倍、七千倍ならざる可からず、その戦は猛烈ならざる可からず、その戦は無慈悲ならざる可からず、その戦は凡ての妥協と協商とを排す、

生か、然らざれば死、これ此の戦のバロール也、

これ文明の眞義なり、これ文明史の教訓なり、

かの戦争廢止説の如きは、要するに、痴人の夢のみ、

◎汝の肋骨を數へよ

汝等自ら、かの進化なく、發達なき神に造られし者の子孫なる乎、將た神と戦ひ、大に戦ひて敗れたる、プロメトイスの子孫なる乎を、知らんと欲する乎、

汝等自ら、汝等の肋骨を數へよ、然らば、汝等は容易く、其何れなる乎を知らん、

若し自ら數ふる能はざる時は、行きて墓を掘る者に問へ、彼必ず汝等の惑を解かん、

ア、汝等は、果して男子なる乎、

◎撰ぶ可き途は唯一つ

汝等今少しく、空想を追ふことを止めて、現實を尙ふことを學べよ、

アポロの世界は美なり、ディオニソスの世界は壯なり、彼は天の視なり、此は地の神なり、天は神の世界なり、地は人の世界なり、汝等暫く、天國を夢想するを止めて、人の國を現實の地上に建設せんことを勉めよ、

人生の意義は、活動にあり、男子の本領は奮闘にあり、アポロの平靜、圓滿、優美、齊整もどより宜しからざるに非ず、而もディオニソスの活動と奮闘とは、かの平靜と圓滿とに達す可き、必須的條件に非ずや、

新興國の民は、活動せざる可からず、膨脹的國民は奮闘せざる可からず、

今はスツルムウンドラングの時代なり、

アポロ的乎、ディオニソ斯的乎、

鄙ぶ可き途は唯一つ、汝等何ぞ躊躇逡巡、決せざる、ア、汝等は、果して男子なる乎、

◎彼等はユダの後裔也

昔はエス教へて曰く、汝の憐人を憐れめよ、汝の敵を愛せよと、

今の信徒の中には、東の憐人を救はんが爲めに、西の憐人を欺き、今日の友を助けんが爲めに、昨

日の友を賣ることをさへ、敢てする者あり、
彼等は蓋しエダの後裔なり、

◎便利主義の信徒なり

古の武士は、信義を重すること、生命よりも甚しく、誓約を守ること、金銀よりも堅し、
かくの如きは、甚だ不便なり、故に今の紳士は、信義を重することを喜ばず、誓約を守ることが好
まず、彼等は几で、便利主義の信徒なればなり、昨日禁酒を誓ひて、今日盃を手にする者は、今の
青年子弟なり、見よ、昨夜の秘密會の事項は、今朝はすでに、市中の街頭に上るに非ずや、
誓を求むる者も、便利主義の信徒なり、誓を立つる者も、便利主義の信徒なり、
便利主義なる哉、ア、便利主義なる哉、

◎愛國心と公共心との衝突

修身齊家治國平天下、

近きより遠きに及び、小より大に進む、これ自然の途なり、故に郷を愛するの心は、即是國を愛す
るの心なり、同郷相助け、相救ひ、相愛するの心は、即是國民互に相助け、相救ひ、相愛するの心
なり、これ愛國心の源泉也、

病を治するの藥は、時に人を殺すことあり、醫の途は唯一つのみ、而も扁鵲は人を救ひ、竹庵は人
を殺す、

小人の郷を愛するは、定も竹庵の病を治するが如し、遂に人をそこなひ、世を亂すに至らずんば止

まず、嘆す可き哉、

これを愛國心と公共心との衝突と云ふ、

◎その妻に語り誇つて曰く

昔は戰國の策士、その妻に問うて曰く、吾舌尙有りやと、

今の策士は、その妻に語り誇つて曰く、吾に二枚の舌あり、吾に二條の聲帶あり、吾事成る可し、安んぜよと、

二條の聲帶はすでに、兩ながら絶へたり、二枚の舌も今や殆んど、その効力を失ひ盡さんとす、事として、成らん遂に成らず、嗚呼悲い哉、

昔はラルテール自ら識るの明なく、普佛兩國の宮庭間を往來すること數回、遂に成すこと能はず、大王の侮辱に逢ふて止む、春日明神憐んで、かの策士に告げて曰く、政治外交は、汝のエレメントに非ず、汝宜しく退て、史書を繙き、自ら悟る所ある可しと、自ら識るの明なき者は危い哉、

◎百尺竿頭更に一步

古の趙高は、鹿を指して、馬なりと云ひて、幼主二世を歎く、左右敢て言ふ者なし、

今の趙高は、百尺竿頭更に一步を進め、馬を指して人なりと云ひて、老主五世を歎く、左右敢て言ふ者なし、言ふ者は、必ず禍を招く、

是に於てか、皿のスープは烟立つに至る、是に於てか、鑛山條例は、穴の周圍を徘徊するに至る、これ實に奇跡也、

◎何故に其行爲を學ばんと欲する乎

キツキンガ―の遠征、アルピオンの侵掠、武帝の雄畧、歷山王の壯圖、海賊とならば、宜しく前者の如くなる可く、山賊とならば、宜しく後者の如くなる可し、梁山泊百八の豪傑、その志は豆の如く小なるも、その事蹟は尙一個の美譚たるを失はず、獨りかの所謂ブランド式の黨類に至りては、その品性の野卑なる、その行爲の陋劣なる、田夫野人も其面に睡せんとす、

何が故に、今の紳士は、相競ふてその行爲を學ばんと欲する乎、

◎曰く、妻子あればなり

大言壯語する者あり、形勢の漸く危からんとするを見るや、忽ちに口をつぐみ、尾を垂れ、宛ら別人の如し、

詰る者あれば、平々然として答へて曰く、妻子あればなりと、

此の如き紳士の妻たり、子たる者は幸なる哉、

◎忘れたるのみ

古の勇士は、死して後はじめて、レーテの水を飲んだり、今の紳士は、生きながらすでに、レーテの水を飲む、

文明の恩澤も亦た大なる哉、

故にもし、彼等にして、背信、破約、食言の失ありとするも、その責は凡でレーテの水に在り、彼等には全くその罪なし、

彼等は唯忘れたるのみ、ア、唯忘れたるのみ、

◎汝もし黄金を欲する乎

汝もし、黄金を積んで、それをして、富嶽の高さに等しからしめんと欲する乎、

われ汝に一策を授けん、聞け、ハーデスの妻プロセルピナ姫に貽して、レーテ水世界一手販賣を開始せよ、忽ちにして、汝の富はロスチャイルト、カーネギーの徒を凌ぐに至らん、

平野水は贅澤品なり、ローデコロンは奢侈品なり、レーテ水は須要品なり、何となれば、今の所謂紳士は、一日もレーテ水なくして、世に處する能はざれば也、

◎宜な哉佛陀の言

佛陀説きたまはく、萬有流轉、ヘラクリット教へて曰く、パンタレイ、等しく萬有流轉の義、東西聖哲の説くところ、實に符節を合するが如し、

見よ、今日、世の紳士たり、人の師表たる者の或者の言ふ所、且つ行ふ所を、朝に右と云ひ、暮に左と云ひ、夕に誓ひ、旦に忘れ、昨は是とし、今は非とす、その一言一行は、悉く是れパンタレイの實現に非ずや、

宜なる哉、佛陀の言、宜なる哉、ヘラクリットの言、

◎是に於てか奇跡あり

楚王細腰を好んで、天下の美人爲めに餓死せんとし、玄宗貴妃を寵して天下の父母、男を生むを喜ばずして、女を生まんとを希ふに至る、此故に、國君暗愚なるときは、硬直の士、遠く斥けられ

凡庸の臣、近く用ひらる、

朝に令して、夕に改む、之を朝令暮改と云ふ、朝に令して、未だ夕ならざるに、改むること、再三再四に及ぶ、之を朝令令暮改改改と云ふ、朝令暮改は常事なり、朝令令暮改改改に至りては、これ實に天下の奇跡なり、

すでに朝令暮改あり、是に於てか奇跡あり、これを多々良事件の科學的説明と云ふ、

◎物に酔ふことあり

古の聖人は、微服して童謡を聞き、今の君子は、犬を放つて、竊に人の後を嗅がしむ、童謡は民の聲なり、常に信す可し、犬の鼻は物に酔ふことあり、必しも常に頼む可からず、危い哉、ア、危い哉、

◎奈々津道具者奈仁奈仁曾

童謡に曰く、

伊萬乃趙高者世加袁登古、奈々津道具者奈仁奈仁曾、以智仁鉛筆貳仁手帳、參仁サタン乃二枚舌加美止農利止乃津宜波藝仁、奈久天波ナイフ奈我定規、銀皮時計者宇噌乃加波、四ブン五ブン者匙加減、六仁ドン乃一小隊ドン乃隊長者宇噌八百、奈々津那娥以我宇萬乃津良、奈我以奈馬江仁那娥以久爾、古志野巾着武羅武羅登、緒志米乃以登我二世萬天茂、奈我久津々計婆於多農志美以於多農志美

◎宜なる哉詩哲の言

馬を知る者は伯樂なり、ペガスを識る者はアポロなり、
神馬と農馬と相伍して、焉んぞ能く相和するを得んや、

宜なる哉、詩哲の言、

◎自己を識るそれ難い哉

デルフィの銘に曰く、汝自らを識れと、自己を識るそれ難い哉、

已れの無能を悟るも、未だ能く自己を識り得たるには非ざる也、已れの過失を認むるも、未だ能く自己を識り得たるには非ざる也、已れの無能を悟らば、當に速かに退く可し、已れの過失を認めなば宜しく直ちに責に任す可し、

今の世、已れの無能を悟り得る者あり、已れの過失を認め得る者あり、退き且つ責に任ずるの勇氣ある者に至りては、寥々として曉天の星の如し、嘆す可き哉、自己を識るア、それ難い哉、

◎其罪は不可追也

語に曰く、良藥口に苦く、忠言耳に逆ふと、忠言の友を陥れんとして、自ら禍を招く者、その愚や寔に憐む可しと雖、その罪は追る可からざるなり、

◎更に宗盛を學ばんと欲する乎

諧謔を解する能はざる者は、共に語るに足らざるなり、諷示を悟る能はざる者は、共に爲すに足ら

ざるなり、

宗盛の自ら決する能はざりしは、悟る能はざりしに由る乎、將た悟りて尙、決するの勇なかりしに由る乎、

孟子曰く、爲さざるは能はざるに非ざる也と、

汝すでに、梁惠王を學べり、更に又平宗盛を學ばんと欲する乎、

◎茗荷三分爾胡麻七分

誰か云ふ、娼婦情なしと、

嘘より出たる誠、誠より出たる嘘、

心中の歴史は、是れ元祿文學の華に非ずや、

燈暗數行虞氏淚、夜深四面楚歌聲、

紅筆の金釘は、夜深の誓約よりも堅し、

後朝の時雨は、燈暗の空涙よりも清し、

童謠にいはく

八十乃奈美太乎賀美和訃美禮婆、

茗荷三分爾胡麻七分、

◎油斷のならぬ者多し

鄙語に曰く、味噌の味噌臭きは、善き味噌に非ずと、然らば、坊主の坊主臭きも、是亦恐らく善き

坊主には非ざる可し、

由來好んで神を説く者に、眞實の信者少く、容易く涙を流す者に、油斷のならぬ者多し、

◎零以下に下落す可し

西洋の諺に曰く、涙は眞珠也と、

眞珠の貴きは、その得難きが故也、

男涙の難有きは、その滅多に見られぬが故也、

男涙も毎日流す様になりては、唐辛と同様、その難有味は、ゼロ以下に下落す可し、

◎提燈を忘るゝこと勿れ

七は聖數なり、歴史は繰返すものなり、この故に、西の國に七敎授あり、東の都に七博士あり、この故に異朝に竹林の七賢あり、我朝に松林の七賢あり、七は聖數なればなり、歴史は繰返すものなればなり、

七賢の流風餘韻は、後昆に傳へざる可からず、これ史家の任務なり、

史家よ、汝等必ず提燈を携帯するを、忘るゝこと勿れ、汝等又必ず顯微鏡を用意するを、忘るゝこと勿れ、

◎東洋の君子國

朝に齊に仕へ、夕に楚に仕へ、昨は東に行き、今は西に赴く、到る處用ひられずと云ふこと無し、孔子曰く君子は器ならずと、彼はまことに君子なる哉、

孔子又曰く、過ぎたるは猶及はざるが如しと、今はの世、君子の少きを憂へず、却てその多きに過ぐるを憂ふ、

何ぞ、今の紳士れ器ならざること、此の如く甚しく、その滔々として、君子化すること、此の如く速なるや、

東洋の君子國は、今や君子病に斃れとす、

◎汝等も亦君子なる乎

古は神農氏、百草を嘗めて、茲にはじめて醫藥あり、千早振神世のむかし、大己貴少彥名の二神、禁厭の法を定めて、豊葦原中國の百姓を安からしめ給へり、今や病を治むるの途、日進月歩、前代無比と稱せらる、而も未だ一人の眞國手を見ざるは何ぞや、

ヤアスターゼは唯、食を貪る者を喜ばしむるに過ぎず、毛生液は偲以て、灰殻治郎の徒の繁殖を促すに止るのみ、

滔々たる松井源水の輩、鍛井竹庵の徒は、共に語るに足らざる也、

將來の國手を以て、自ら任ずる者に告ぐ、汝等何ぞ奮勵一番、君子病のバチルスを發見し、その根治劑を發明して、此國を益せんと欲せざる乎、

或は曰く、汝等も亦た君子なりと、

果して然る乎、ア、果して然る乎、

汝等少しく自ら顧みて、汝等の祖神に對して、愧る所あれ、

◎動物なりや否や

希臘に奴隸あり、アリストテレースは千古の大哲なり、而も尙人間の自由平等を解すること能はず、羅馬に奴隸あり、ユスチニアンの法典は、妻子奴婢を見ること、宛も牛馬家財の如し、今の世、尙かの例に倣ふ者ありや、

龍山に神あり、その神告げて曰く、青年子弟は動物なりや否や、是凡ての行政の先決問題也と、能くこの言を解する者、果して幾人ぞ、

◎乎、乎、乎、乎、乎、乎、乎

昔はエス戒めて曰く、汝等唯然り然りと云へ、唯否否と云へ、それより過ぎたるは悪しかりなんと、今や龍山に神あり、其名をロースと云ふ、その神告げて曰く、千人の諸々は、一人の謬々に如かず、千羊の皮は、一狐の腋に如かず、千のエビゴーンは、一のプロゴーチに如かずと、

汝等瓦と成りて、全からど欲する乎、玉と成りて碎けんと欲する乎、相率てエビゴーンと成りて、身を全ふせんと欲する乎、先んじてプロゴーチと成りて、戦はんと欲する乎、財を得んと欲するか、名を得んと欲するか、逸樂を欲するか、苦難を希ふか、産し治めんか、學を修めんか、アフロデイトの言に従つて、右せんと欲するか、アテーチの教に従つて、左せんと欲するか、パリスたらん乎、ヘラクレースたらん乎、

取る可き途は唯一つ、汝等何ぞ自ら決せざる、

汝等の肋骨を數へ見よ、汝等自ら數ふる能はずんは、歸りて汝等の妻子に問へ、

◎一葉落ちて天下の秋

天地開闢茲に七百七十七萬七千七百七十七年、天に七星出で、地に七賢生じ、龍山に神現はる七星七度び回轉して、惑星の軌道を犯し、その一角將に隕んとす、七賢七たび會合して、松林の精氣に觸れ、その一個將に禍その身に及ばんとす、

龍山の神、奇跡を現すること七たび、時至りて今や再び隠れんとす、

一葉落ちて天下の秋を知る、古の聖人は、仰で天の象を觀、俯て地の文を察し、以て時運の轉變を機微に間に推知す、今や……………

(丁)

崖急に梅盡く斜なり

子規